京都・奈良名所紹介

天竜寺

後醍醐天皇が亡くなり、その菩提(ぼだい)を弔うため、夢窓疎石(むそうそせき)（注１）が足利尊氏に進言し、光厳上皇の院宣(いんぜん)（注2）を受けて開創されることになった。

池泉回遊式(ちせんかいゆう)(注３)の広い庭園や建造物など見所が多く、四季折々の美しさを見せる。

妙心寺

修行を重んじる厳しい禅風を特色とする「林下(りんか)」の代表的寺院である。

その中で退蔵院の枯山水(かれさんすい)（注４）は、画家であった狩野元信の作で「元信の庭」と呼ばれている。また、山水画の始祖と言われる如拙(じょせつ)の晩年の名作「瓢鮎図(ひょうねんず)（国宝）」があり、足利尊氏が命じて如拙に描かせたもので、ナマズを瓢箪(ひょうたん)で捕まえるという難題を当時の禅僧に考えさせた画。

竜安寺

応仁の乱の東軍総帥でもあった細川勝元が創建した禅寺。

枯山水の庭園はあまりにも有名。15 個の石は、庭をどちらから眺めても必ず 1 個は他の石に隠れて見えないように設計されているという。それは、東洋では十五夜（満月）にあたる 15 という数字を「完全」を表すものとしてとらえる思想があり、15 に 1 つ足りない 14 は「不完全」を表すとされている。そのため、物事は完成した時点から崩壊が始まるという思想があり、建造物をわざと不完全なままにしておくことがある。

鹿苑寺

足利義満が、西園寺家の代々所有していた西園寺を河内国の領地と交換に譲り受け、建立した。

金閣寺の由来となった金閣は、漆地に金箔を押した三層の建物で正式には舎利殿(注5)。初層は寝殿造(注6)風、二層は武家造(注7)、三層は禅宗様(注8)、それぞれに異なる様式を採用した特異な建築である。屋根の上には鳳凰(注9)が飾られている。

大徳寺

1325年に創立され、20を超える院が立ち並ぶ。

貴族、大名、商人、文化人など、幅広い層の保護や支持を受けて栄え、一休宗純をはじめ、沢庵宗彭などの名僧を輩出した。また侘び茶を創始した村田珠光や武野紹鷗、千利休をはじめ多くの茶人が大徳寺と関係をもっている。

龍源院、高桐院、大仙院など有名だが、一般公開されていない所もあるので注意が必要。

北野天満宮

菅原道真が大宰府(注10)に流され没し、京で天災が相次いだため、道真を祀るために造営された。

梅と牛に関係が深い。道真は梅を愛し、そのことにちなみ境内には梅が多く植えられている。牛は天満宮において祭神の使者とされているが、その理由については多くの伝承があり、どれが真実なのかわからないが、それらの伝承にちなみ北野天満宮には神使とされる臥牛の像が多数置かれている。

上賀茂神社

正式には賀茂別雷神社。賀茂御祖神社（下鴨神社）とともに古代の賀茂氏の氏神を祀る神社であり、賀茂神社と総称される。賀茂神社両社の祭事である葵祭で有名である。

境内は緑あふれた広大な敷地で、五穀豊穣の神事が行われる開放的な芝生となっている。

二条城

現在の二条城は徳川家康が築城したもの。将軍上洛時に使用した。

本丸と豪壮な二之丸御殿からなる。 二之丸御殿の絢爛豪華な建築と障壁画、堀沿いの梅林には、一本の木に紅梅白梅が入り混じって咲く「源平咲分」と呼ばれる梅もある。

慈照寺

室町幕府 8 代将軍足利義政は、子の足利義尚に将軍職を譲り、 1482 年から、東山に造営を始めた。当時は応仁の乱が終わった直後で、経済は疲弊していたが造営を進め、義政の死の直前まで 8 年にわたって続けられた。

金閣は文字どおり金箔を貼った建物であるのに対し、銀閣には銀箔を貼った痕跡はない。当初は銀を貼る予定だったが、幕府の財政事情のためにできなかった、という説は俗説に過ぎない。

また池泉回遊式の庭園で苔が美しく、石庭も備わっている。そして義政の書斎であった東求堂は、書院造の源流とされている。

南禅寺

京都五山の上におかれる別格扱いの寺院で、日本の禅寺のなかで最も高い格式を誇る。また皇室の発願になる禅寺としては日本で最初のものである。

石川五右衛門（注 11）が「絶景かな絶景かな」とうたった巨大な三門に圧倒される。「虎の子渡しの庭」と呼ばれる枯山水庭園や、小方丈の障壁画は狩野探幽の作と伝えられる。

また境内に琵琶湖疏水の赤いレンガの水道橋が見える。

八坂神社

祇園祭で知られ、元々「祇園社」「祇園感神院」と呼ばれていたのが、神仏分離令（廃仏毀釈運動）(注 12)により、「八坂神社」と改められた。

隣接する円山公園はもともとここの境内で、桜の名所。

清水寺

805 年に坂上田村麻呂が寺地を賜り、嵯峨天皇の勅許(ちょっきょ)を得て公認の寺院となったことは史実とされ、この頃に本格的な寺観が整ったようである。本堂をはじめとする伽藍(がらん)はたびたび放火にあっており、現在の本堂は徳川家光の寄進により再建されたものである。

「清水の舞台から飛び降りるつもりで」と言うが、清水寺の古文書によれば、実際に飛び降りた人が 1694 年から 1864 年の間に 234 件に上り、生存率は 85.4%であった。明治政府が飛び降り禁止令を出し、柵を張るなど対策を施したことで下火になったという。

また、本堂を下から見ると、建物の骨格がさらけ出されていて見事である。

智積院(ちしゃく)

国の名勝に指定されている庭園は、千利休好みと言われ、人も少なくゆったりと楽しむことが出来る。国宝に指定されている長谷川等伯一派の障壁画が飾られている。

蓮華王院(れんげ)

この地には、もともと後白河上皇が離宮(りきゅう)として建てた法住寺殿があり、その広大な寺の一画に建てられたのが蓮華王院本堂、通称三十三間堂。

木造千手観音立像の高さは 166 ～167cm 前後。計 1,001 躯が並ぶ。その目の前に立つと圧巻である。

平等院

光源氏のモデルとも言われる源融（みなもとのとおる）の別荘だったものが宇多天皇に渡り、天皇の孫である源重信を経て摂政藤原道長の別荘「宇治殿」となったものである。平安時代後期、日本では「末法（まっぽう）思想」が広く信じられていた。釈尊（しゃくそん）（釈迦（しゃか））の死から 2,000 年目以降は、仏法がすたれ、天災人災が続き、世の中は乱れるとする思想で、平等院が創建された 1052 年は、当時の思想ではまさに「末法」の元年に当たっており、当時の貴族は極楽往生を願い、西方極楽浄土の教主とされる阿弥陀如来を祀る仏堂を盛んに造営した。

阿弥陀堂、通称鳳凰堂に入れることができ、定朝（じょうちょう）作の阿弥陀如来像を間近で見られる。

東大寺

大仏殿は世界最大の木造建築物。743 年に聖武天皇が盧舎那仏（るしゃなぶつ）（注 13）建立の勅願を発令し、その大仏を安置する寺として造営した。752 年に大仏殿が完成し以降次々と堂塔が建築され 40 年近くかかり完成した。都が長岡へ移ったあとも歴代天皇の手厚い保護を受けて、興福寺とともに栄華を誇った。しかし、平重衡（たいらのしげひら）よって大仏殿をはじめ伽藍の大半を焼き払われ、重源によって再興されたが、三好・松永の乱で、わずかな建物を残して再度焼失。現在の伽藍の多くは江戸時代に再興されたもの。

南大門の運慶・快慶作金剛力士像をはじめ、三月堂の不空羂索観音立像（ふそらけんさくかんのんりつぞう）、戒壇院の四天王像などの数多くの文化的遺産を残している。

興福寺

中臣鎌足夫人の鏡王女（かがみおおきみ）が夫の病気平癒を願い、山階（やましな）（注 14）に創建した山階寺が起源。平城遷都に際し、鎌足の子である藤原不比等は現在地に移転し、「興福寺」と名付けた。平安時代には春日社の実権をもち、大和国一国の荘園のほとんどを領して事実上の国主となった。その勢力の強大さは、比叡山延暦寺とともに「南都北嶺（ほくれい）」と称された。宝物館には、阿修羅像、仏頭、天燈鬼（てんりゅうき）・龍燈鬼（りゅうとうき）立像など国宝が数多く展示されている。

元興寺（がんごう）

蘇我馬子が飛鳥に建立した、日本最古の本格的仏教寺院である法興寺がその前身である。平城京遷都に伴って飛鳥から移転し、元興寺となった。

未だに建立当時の瓦が屋根に使用されている。

薬師寺

天武天皇が後の持統天皇である鵜野讃良（うのささら）皇后の病気平癒を祈願し創建したのが薬師寺であるとされる。

古くから火災や地震に見舞われ、さらに戦国時代の兵火でほとんどの建物が失われたが、第二次世界大戦後に復興事業が進められ現在の姿となった。フェノロサ（注 15）が「凍れる音楽」と評し、創建当時から存在する東塔や、それと対となる第二次大戦後に復旧された西塔、国立博物館に展示されたことが記憶に新しい日光、月光菩薩像などがある。

ちなみに東塔より西塔の方が、少し背が高くなっている。なぜなら月日がたって材質の木が縮み、土台が沈んでいくことを考慮して、将来は東塔と同じ高さになるよう、計算されて作られているからである。

法隆寺

601 年に聖徳太子は斑鳩（いかるが）（注 16）の地に斑鳩宮を建て、この近くに建てられたのが法隆寺であるとされる。用明天皇が自らの病気平癒のため建立を発願したが、用明天皇が亡くなったため、遺志を継いだ推古天皇と聖徳太子があらためて、像と寺を完成したという記述が金堂の「東の間」に安置される銅造薬師如来坐像にある。しかし、正史である日本書紀には創建については何も書かれていない。

木造塔として日本最古の五重塔や、金堂、伝法堂、夢殿などの建築物はもちろん、阿弥陀三尊像、観音菩薩（かんのんぼさつ）立像、玉虫厨子（たまむしのずし）など数多くの芸術作品が残されている。

中宮寺

法隆寺に隣接する寺。元は聖徳太子が母・穴穂部間人(あなほべのはしひと)皇后の御所を寺としたと伝えられている。

境内も本堂も非常に小さいが、本尊である木造菩薩半跏思惟(はんかしゆい)像は寄木(よせぎ)技法による作例としては最古である。完全な状態で間近に見ることが出来る。

長谷寺

長谷寺の創建は 8 世紀前半と推定されるが、創建の詳しい時期や事情は不明である。牡丹の名所であり、4 月下旬～5 月上旬は 150 種類以上、7,000 株と言われる牡丹(ぼたん)が満開になり、当寺は古くから「花の御寺」と称されている。また「枕草子」、「源氏物語」、「更級(さらしな)日記」など多くの古典文学にも登場する。

入口の仁王門から本堂までは 399 段と長い芸術的な登廊(のぼりろう)を上る。そして本堂から眺める風景は絶景である。

室生(むろう)寺

役小角(えんのおづの)(注 17)の草創、空海の中興という伝承もあるが、記録で確認できる限りでは、時期は奈良時代最末期の草創と思われる。女人の入山が許されたことから「女人(にょにん)高野」と呼ばれる。

山麓から中腹にかけて境内となっている。典型的な山岳寺院で、石段を上るごとに次の堂宇(どうう)が現れる。

その中でも五重塔は 800 年頃の建立で、屋外にある木造五重塔としては、法隆寺塔に次いで日本で 2 番目に古く、国宝・重要文化財指定の木造五重塔で屋外にあるものとしては日本最小である。

なお駅から遠く（約 5km）参拝するときは時間に注意する必要がある。

吉野

応神天皇の遊興の地となり、離宮（りきゅう）として吉野宮がおかれたとされ、壬申の乱の直前の大海人皇子及びその妻・鸕野（うの）皇女（持統天皇）の隠遁地、持統天皇の行幸の地として記されている。天武系王朝の故地として聖武天皇もたびたび行幸した。平安時代には、役小角が開いたと伝えられる金峯山寺（きんぶせんじ）が建立され、吉野山は修験道の地となる。

鎌倉時代後期には、後醍醐天皇の皇子である大塔宮護良（もりよし）親王が吉野山で倒幕の兵を挙げる。後醍醐は幕府滅亡後に京都で建武の新政を開くが、南北朝時代には皇居や行政機関が吉野へと移った。

桜の名所として知られ、また非常に山深く、一日で見てまわるのは非常に困難である。

金峯山寺

7 世紀に活動した伝説的な山林修行者・役小角が開創したと伝え、蔵王権現（ごんげん）を本尊とする寺院である。

蔵王堂内祖師壇において，毎日採灯式壇護摩供（さいとうだいごまく）（注 18）を修法しており、それをすぐ側で見ることができる。そういった意味で迫力がある寺。

部員が訪れた当時は「吉野南朝を偲ぶ特別展」が開かれており、普段は公開されていない宝物も多数公開されていた。護良親王のご生誕７００年を記念したもので、珉和筆の村上義光興奮之図などのほか、近年の仁王像修理に際して両像の胎内より発見された木造五輪塔などの多数の納入品が特別展示された。

お食事処

松葉

1860年、現在の南座(注19)向かいにあった北座で芝居茶屋を誕生させ、屋号を「松葉」としました。以来松葉は、京の代表的な味として親しまれてきました。鰊(にしん)料理は有名ですが、その中でも鰊蕎麦(にしんそば)は絶品です。部員にも絶大な人気を誇った松葉の鰊蕎麦、ぜひご賞味あれ。

阪急電鉄 河原町駅［1番出口］より徒歩3分

京阪電鉄 四条駅［6番出口］すぐ

注釈

注1:鎌倉後期～南北朝期の臨済宗の僧。後醍醐天皇や足利尊氏の帰依(きえ)を受けた。

注2:院政が開始された後、院から出された上皇の命令を伝える公文書のこと。

　天皇の命令を伝える公文書は「宣旨」なので、院の宣旨を略して「院宣」となった。

注3:池を中心として、その周りに道や木々などを配置する庭園のこと。

注4:水の代わりに砂や石を用い、その地形だけで水の流れる風景を表す庭のこと。

注5:仏教の開祖である釈迦の骨が安置されていると言われる場所のこと。

注6:平安時代の貴族住宅の形式。

注7:武家らしい住宅様式のこと。前期は主殿造、後期は銀閣寺などが有名な書院造である。

注8:鎌倉時代、禅宗と共に宋から入ってきた建築様式。鐘のような形をした窓などが特徴的。

注9：古代中国で尊ばれた想像上の鳥。

注10:古くから中国、朝鮮などに対する外交上の要衝であった九州北部に置かれた役所。

しかし中央から遠く離れるがために、権力闘争に負けた貴族が左遷されることも多い。

注11:安土桃山期の盗賊。豊臣秀吉を暗殺しようとしたところ、秀吉秘蔵の「千

鳥の香炉」が鳴って捕まった、など半生にさまざまな説があるが、実際正体は分かっていない。

ただ、分かっているのは彼が釜茹での刑（釜煎りの説も有り）で処刑されたことだけである。

注 12:日本において仏教は元々存在していた神道と共存、融合しながら発展していった。寺院が神社を運営するという「神宮寺（じんぐうじ）」はその顕著な例の一つである。

しかし明治に入り、当時日本神話に登場する「天照大神（あまてらすおおみかみ）」の子孫を名乗っていた天皇家（第二次大戦後、昭和天皇が人間宣言を行い現在は名乗っていない）の権威を高めるため、神道を国家の管理下におくこととした。

そのためには、これまで密着に関わってきた神道と仏教を分離し、独立させる必要がある。このための法令が、神仏分離令である。

が、国家が神道へ力を入れ、弱体化した仏教は民衆の攻撃の対象となった。

多くの仏像や宝物、建物が破壊され、放火され、海外流出したものや薪（たきぎ）にされてしまったものさえある。また、明治政府自体も寺院を追い詰める政策を取った為、多くの僧侶がその職を捨て、中には寺院の土地や宝物を売り逃げするものまで現れたのだった。

これが廃仏毀釈運動で、約一年続き、その結果数え切れない程の文化財が失われた。

注 13:俗に言う「奈良の大仏」。

注 14:現在の京都府山科区。

注 15:明治期のお雇い外国人。文明開化以降国内で軽視されていた日本文化の価値が見直されるきっかけを作った人物であり、文化財保護などにも大きな役割を果たした。

注 16:現在の奈良県斑鳩町。

注 17:修験道の開祖と言われる人物。数々の伝承を残す。

注 18:大壇を設け、そこで修験者が願い事の書かれた護摩木を燃やしながら祈祷を行うこと。

注 19:江戸時代から現存する歌舞伎座。